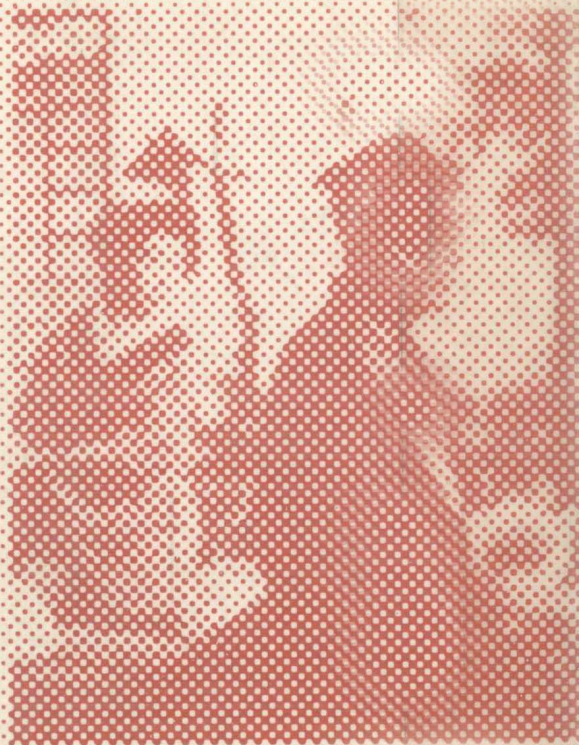


菊島隆三シナリオ選集
III



菊島隆三シナリオ選集Ⅲ

昭和五十九年七月三十一日第一刷印刷
昭和五十九年八月十五日第一刷発行

定価一八〇〇円

著者 菊島隆三

発行者 荻洲照之

印刷所 精興社

製本所 牧製本

発行所 榊サンレニティ

東京都渋谷区広尾五―四―一七A―一
電話〇三―四四二―〇八二 一五〇

発売所 星雲社

東京都文京区小石川五―一―九―二五
電話〇三―九四七―二〇二 二二二

© R. Kikushima, Printed in Japan.

落丁・乱丁本はお取り替え致します(制作：希望社)

ISBN 4-7952-3756-5 C 0374

菊島隆三シナリオ選集 III



発行 ㈱サンレニティ

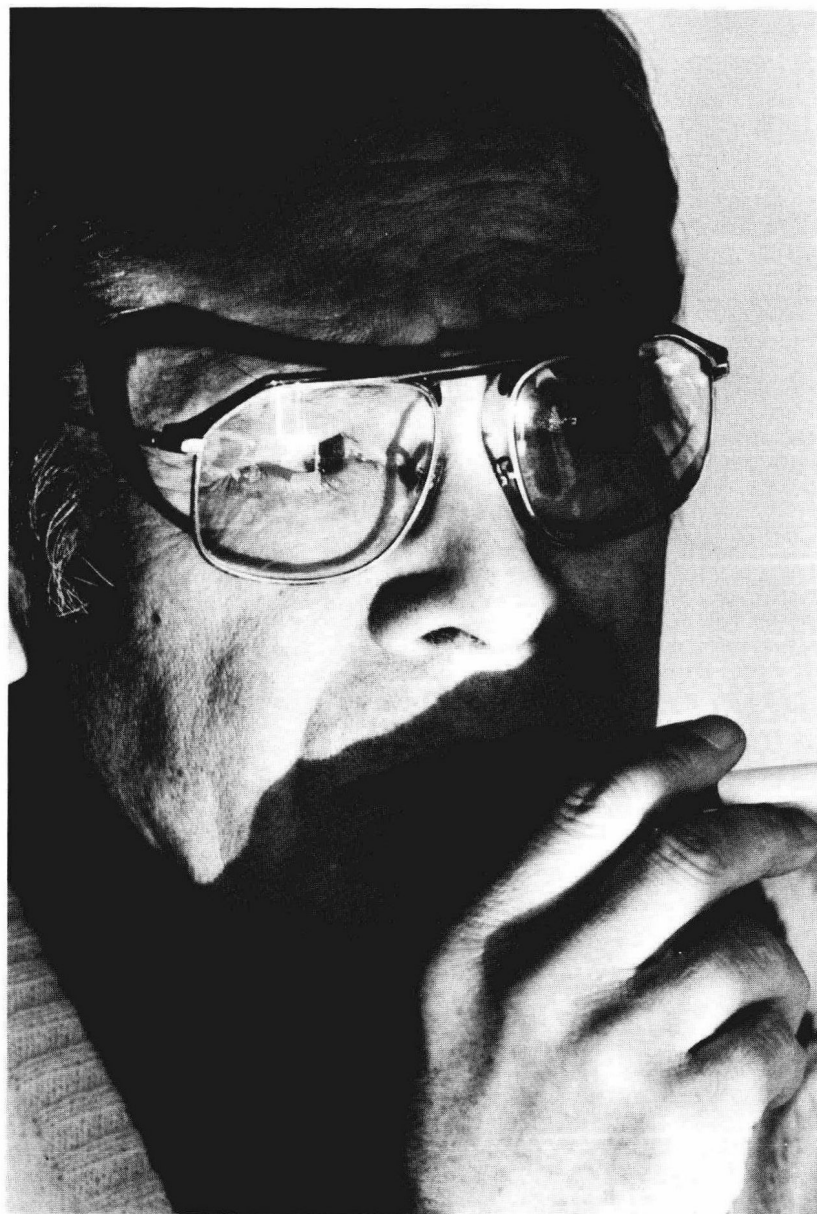
発売 星雲社

定価 一八〇〇円



菊島隆三シナリオ選集
III

Sanrenity



著者近影（朝日新聞社提供）

目次

国定忠治	9
平手造酒	65
六人の暗殺者	111
王将一代	161
狐と狸	221
ふんどし医者	283
兵隊やくざ	333
闇を裂く一発	385
謀殺下山事件	431
解説 白井佳夫	490
菊島隆三映画脚本総覧他 小笠原隆夫	499

装幀 保坂延彦

国定忠治

◀1954 年（昭 29）日活作品▶

監督 滝沢英輔

主な配役

国定忠治……………辰巳柳太郎
下宿の安五郎……………清水彰
お町……………花柳小菊
日光の円藏……………島田正吾
おとよ……………津島恵子
稲荷の九郎助……………郡司八郎
清水の頑鉄……………河村憲一郎
代官武部玄蕃……………秋月正夫
島の伊三郎……………石山健二郎
おなか……………久松喜世子

(F・I) 街道

六頭の馬が突ッ走って行く。

馬上の侍の陣笠が、キラッと陽に光る。

画上タイトル(以下オフシーンの声で読まれる)

徳川時代の末期――

幕府の専制的行政の行きづまりと、その腐敗によって世は不況のどん底にあり、饑饉全国に相次いで起こった。

野良仕事をしていた百姓が、何事か？ と云うように、道に上って見る。

画上タイトル

然し、階級制度の最上位にある武士――

経済的優位に立っている商人――

大地主――

等是不況の圏外にあった。

ぬかるみを疾駆する馬。

パシャッ！ と見迎えた百姓の顔に泥がはねる。

いつの時代にも虐げられるのは、とにかく庶民だけである。

泥をぬぐいながら卑屈に笑っている百姓の顔。

庶民――

それは、こもりんざい植木鉢に飾られる事のない、稲のようなものである。

しかし、上は上、下は下で順序格式の決まった階級の掟を破って、勃興した新階級があった――武士でもなく、町人でもなく、勿論百姓でもない――

2

画上タイトル

上州、佐位郡国定村――

3

山峡の道

駆けて来る陣笠の六騎。

その一人が一方を指さして叫ぶ。

「あッ、いたぞッ！」

六騎、道からその指さす方へ馬を乗り入れる。

そこは水田である。馬は五、六寸にのびた稲を目茶

目茶にふみにじって水田から水田へ――

田の草をとっていた百姓、驚いて身をさける。百姓ながら、精悍な面魂――

若き日の忠治である。

忠治「あっ！なにするだッ」

しかし、馬上の侍たちは返事もせず田を踏みつけて通りすぎる。

忠治のいるあぜ一つ距てた隣の田で働いていた百姓安五郎も驚いてその行手を見る。

侍たち、馬から下りると、屁っぱり腰で何かを追いつめるように、抜き足差し足で目的物に近寄る。

田のあぜの灌木にとまっている一匹の鷹。

侍の一人、林田がやっとその鷹を捕える。

林田「やれやれ、世話を焼かせる奴だ」

と、その鷹を大切そうに持って馬に乗りかかり、踏みつけられた稲を片手に怒った顔で立っている忠治と安五郎に気付く。

林田「何か云いかけようとする二人に」鷹狩りの最中この鷹が逃げたのだ」

と、言訳のように云って行きかける。

忠治「お侍様、ここをこのまま行っちゃう気だか」

林田「何？」

忠治「手に握った稲を示し」こりゃどうして下さるだ？稲が死んじまったら、俺らたちもうっ死んじもうでねえか」

林田「大げさな事を申すな」

忠治「大げさじゃねえだ。作物は百姓の生命だ。(安五郎がハラハラしてとめるのもきかず)百姓ばかりじゃねえ、お侍さんだって米のめし喰って生きてるだべ？」

林田「(ぐっと詰まるが)百姓ッ言葉をつつしめッ！代官様御寵愛の鷹を捕えに來たのだ。田を荒したぐらいが何だッ」

忠治「(負けずに)なんぼ代官様の鷹でも、鷹は鷹でねえか、人間の生命と……」

ピシャッ！……とその顔に林田の手が飛ぶ。

林田「たわけた事を申すと、その儘にはすておかんぞ」と、馬を引いて行きかける。

殴られて尻もちをついていた忠治、その袖をつかんで、

「あんまりだッ……こんなに荒されちゃったじゃ……」

林田「くどいッ！(と、振りきる)」

忠治、またすがりつこうとした時、「代官様だ」

と、侍の一人が駆け出す。

ハッと道の方を見る忠治と安五郎。

林田「頭が高いッ(と、忠治たちをいつたして去る)」

あわてて、田の中へ土下座する忠治と安五郎。

口惜しそうにあげた視線の先に——鷹狩りの姿の代官武部玄蕃が、大勢の従者を従えて来る。

林田たちが手柄顔に鷹を鷹師に手渡すのを満足そうに頷いて通り過ぎる。

目茶目茶に踏み荒された田——坐ったまま上眼づかいに、その田をうらめしそうに見る忠治と安五郎。

(WIPE)

庄屋彦右衛門邸の表

豪壮に構えた門柱に貼紙。

ごねんぐ米運ばん人足入用のこと
馬子ちゃん 百もん
庄屋彦右エ門

その庭先にはうす高く積まれた年貢米の山。

門の前に四、五十人の百姓が列の先を争って居る。

門内から出て来た雇人頭の権次が、

「並ぶだ、並ぶだッ（と、騒ぎを鎮める）」

こづき合いながらつくられる列の真中辺に忠治と安

五郎。

横合いから老人が二人の間へ割込もうとする。

忠治「駄目だッ、とッつまァ……」

老人「頼むだ、おらおとついでから粥一杯喉に通してねえだ

から……」

忠治、嫌な顔をしながらも自分の前へ入れてやる。

「お願エだ、おらァとこは、餓鬼が病んでるだから……」

と、これも後から来たららしい百姓が云う。忠治、渋々

入れてやる。

又一人来て、

「お願エだ、おらァとこの婆さまが……」

忠治「（怒鳴る）駄目だ、駄目だッ。おらだって、田ンば

荒されてひどい目にあってるだど！」

宿場はずれ

カランとした真昼の街道。

『御やすみ処』と書いた幟の下に、つながれている

二頭の馬。

その背に、年貢米の木札をつけた米俵。

腰掛茶屋

茶屋の老婆おながが、渋茶を入れながら、表へ話し
かける。

「ンだけど、年貢米運んで百文貰えば、御ンの字だどお。

庄屋ン所に五、六十人も押し掛けたって云うでねえか。

お前達ァ運がいいコッだあ……昨ンのうも、横手の在で、

五人も餓え死にしたそうでねえか？」

と、表を見て目をまるくする。

「あれッ、お前達、そんだらもん持つと、手が腐るどー」

コロツと、地面に転がる骸子。

「道でひろっただよ……ほれ、丁だ」

と、ありあわせの湯呑みを壺がわりに丁半をやって

いるのは忠治と安五郎。

おなか「やめれッ！」

忠治「（無邪気に）ばあさま、余計な心べえすると、早死

にするぞ」

おなか「なんだと？」

忠治「ふふ……むすびを賭けてるだ」

おなか「むすび？ 猶いけねえ、おめえだちイ、百姓のくせして、米のめしが……なんだ、芋か」

忠治に負けた安五郎が、渋々と芋を差し出す。

忠治とは対照的な神経質な面ざしである。

忠治、受取った芋を頬張って、

「ばあさまア、そこにある赤鮎のつけ焼を賭けねえか」

おなか「バカタレ！ 地獄へ落ちるど」

忠治「地獄か、おら行ってみてえや。ハハハハ……」

と、大笑いして、芋を半分しょんぼりしている安五郎に差し出して眼をまるくする。

あか抜けた風采をした美しい女が、ツンツンしながら入って来る。その後を追って来た若旦那風、新助が、

「お町、そんな無理な事云ったってしょうがないじゃないか」

お町「(耳も藉さず、齒切れのいい江戸弁で)小母さん、

おひる使うんだから、何ンか見つくろってね」

新助「なあお町、もう一度考え直してくれ」

お町「嫌だつて云うのに……くどいねえ。贅沢はしたい放題させるなんて……あたしヤ柳橋に居た方が余ッ程気楽だったよ」

新助「そりヤ判るけど、家にヤ家の家風ツてものが……」

お町「沢山ッ……あたしヤ贅沢の好きな女なんだから……」

と、おなかの差し出した鮎の煮付けを一箸口にしてまずそうにブツと吐き出し、

「おおかrai……これだから田舎、嫌ンなっちゃう」

と、ボンと茶代を置いて立ちかける。その前に、物珍らしそうに芋を頬張ったまま突立っている忠治。

お町、何を見てるんだ、というような顔で見返すが、さっさと去る。

「お町ッ、お町ッ」

と、恥も外聞もなく追って行く新助。ポカンと見送っている忠治と安五郎。

おなか出て来て見送り、床几の上の鮎の煮付けを片付けたが、

「贅沢こいて……あんな女、しんしょう幾つあっても足ンねえどオ」

忠治「(安五郎と顔見合わせて溜息のように)江戸にヤあんな女が居るだなあ……」

安五郎「おら夢でもいいから……」

おなか「バカタレ！ 寝小便ン垂れるど」

忠治「ほんとか、ハハハ……安五郎、出掛けるべえ」

7 茶屋の裏手

出て来た二人、びっくりする。

馬が居ない——落ちてゐる年貢米の木札。

安五郎「盗まれただ」

忠治、キョロキョロ見廻す。

安五郎「どうすべえ」

忠治「どうすべえって、探すよりしょうがねえでねえか」

ッ

安五郎あわてて駆け出す。

忠治、その後を追って気がついて反対側へ。

おなか「(とび出して来て) おめえだちィ、茶代どうするだ！」

(WIPE)

8 庄屋の家の土間

「馬鹿たれッ！」

と、怒鳴る庄屋彦右エ門の前に小さくなって頭を下げる忠治と安五郎。

彦右「おめえたち二人、ぐるになって、馬と米をかくしただべ？」

忠治「おら達、そんな……」

彦右「いや、それに違えねえだ。嘘こくと代官所へつき出すど！」

忠治「(反抗的に) ああ、つき出すがいいだ。俺たちが真直なことは茶屋のばあさまだって知ってるだ。安五郎、行くべ、行くべえ」

(WIPE)

9 代官所白洲

呼出されている彦右エ門、忠治、安五郎、忠治の父五右エ門、茶屋のおなか。

忠治、吟味役大西に申し開きをしている。

忠治「へえ、それがあつという間のことで……この野郎と、

いえ、この安五郎とひるにすべえと思って茶店の表で一服する前にちょっと(と、思わず壺を振る手付きをしてやめる)」

大西「ちよつと、どうしたのだ？」

忠治「(どぎまぎして) え……その……馬が水を呑みてえって云うもんで……」

大西「たわけッ、(笑いを含みながら) 馬が物を申すか。ハハハ……」

五右「(恥じ入ったように) 忠治ッ、何こくだッ。(と、大西に平伏して) 伴に限って、決してそのようなことは……」

大西「よいわ、よいわ、もう判った——庄屋彦右エ門、盗んだのは兩名でないらしいな」

不服そうな彦右エ門の顔を、忠治がどうだというように見返る。

大西「然し、盗られた物の弁償と云っても此の者どもにはどうにもなるまいから、どうだ、馬代りにお前の所で一年ばかり奉公させたら、損もしまい」

彦右「へえ！」

忠治「(啞然として) そ、そんな馬鹿な……盗った奴はおかまいなくって、おら達ばかり……」

憤然として云いかけるのを、五右エ門が、「忠治ッ」

と叱りつけるように云って、無理矢理に忠治の頭を押えつける。

(F・O)

証

一年貢米 八俵

馬 二頭

右代金〇兩、返済の為、向う

一ヶ年間、御奉公仕可

若し年期中に奉公取止め候節
は元金〇兩その儘借用金とし
て振替致されても異議無之候

国定村百姓

忠 治 拇印
同 安五郎 拇印

年 月 日

庄屋彦右エ門殿

(O・L)

庄屋の家 厨の土間

忠治と安五郎、百姓道具をかついで、汗を拭きなが
ら入って来る。安五郎「まだ三月か……大体、おめえが、あの時骰子なん
かやったから……」忠治「また愚痴か、よせ、人間万事サイオウの馬つうでね
えか」

同 裏手

カン！ カン！ と、忠治が太い根株に斧を打ち込
んでいる。

やがて、手を休めて流れる額の汗をぬぐう。

傍らにウンザリする程積んである薪の山。

おとよが茶を運んで来る。

安五郎「なんだ、そりゃ？」

忠治「知らねえ。養寿寺のお住職が、都合のわりい時よく
そう云ってただ」

と云って、ふと一方を見て安五郎をつつく。

その二人の好奇の視線の先——可憐な感じの女中、
おとよが、柿の実を入れたざるを抱えて入って来
る。見とれたように、ぼんやりとながめている忠治と安
五郎。その二人の視線を避けるように通り過ぎようとする
おとよ。

忠治「おめえ、いつ来ただ？」

と、柿の実の一つを奪る。

おとよ「(あわてて) あ、それは……」

忠治、いたずらっぽく笑って、ガブッと噛みつくが、
途端にベッと吐き出す。渋柿だ。おとよ、ぷっと吹き出しそうになるのをこらえて去
る。その後ろ姿を、ポーッと見送っている安五郎。

(WIPE)